第 56 回土木計画学研究発表会・講演集

神奈川県平塚市の馬入水辺の楽校の活動実態に関する研究

清水 敏志 [1]・梶田 佳孝 [2]・小西 孝典 [1]

[1]非会員 東海大学大学院 工学研究科建築土木工学専攻（〒259-1292 神奈川県平塚市北金目４-１-１）
bob.is.messi.040489@gmail.com

[2]正会員 東海大学教授 工学部土木工学科（〒259-1292 神奈川県平塚市北金目４-１-１）
yokaji@tokai-u.jp

本研究では市民が主体となって運営している馬入水辺の楽校の活動実態活動の創設期から現在に至るまでの時系列に活動状況を分類して関連の資料などに基に分析してその実態、課題について検討を行った。水辺の楽校とは国土交通省が始めた事業で、始めた目的は、「川に学ぶ」社会の実現を目指している。若い世代や会社勤めの方の参加が極端に少ないというのが現状だということが分かった。これが、「馬入水辺の楽校」が抱えている課題である。、20～50 歳の間の人がいないことが事例集の内容などから明確にすることが出来た。

Key Words: *Mizube no gakko, MILT, Citizen, Actual Activity*

1. はじめに

近年、活動が拡大・縮小する、あるいは組織が拡大・縮小するなどその時々において変化している。そのきっかけとなる社会の変化や組織の有り方、制度の活用がどのように進められてきたか、そして活動を続けるには資源が必要である。そこで注目したのが水辺の楽校である。水辺の楽校とは国土交通省が始めた事業で、始めた目的は、「川に学ぶ」社会の実現を目指している。そして
「川に学ぶ」社会の実現のための基本方針は 4 つある。
①人々の関心を高める魅力ある川づくりが必要で、人々が川に関心を持つためには川をもっと魅力あるものにすることが必要。②川に関連した正しく広範な知識・情報の提供が不可欠。③人と自然との共生のための行動意欲、自ら危険を回避する態度を身につけるために川に学ぶ機会の提供が必要。④主体的、継続的な活動のためには河川管理者や地方公共団体等などがそれぞれの役割を果たすためには、各主体の連携が必要。この４つが川と人が寄り添うためのポイントである。

本研究では、神奈川県平塚市の馬入水辺の楽校を対象として、活動の創設期から現在に至るまでの時系列に活動状況を分類して関連の資料などに基に分析してその実態、課題について検討する。

2. 平塚市の概要

人口は平成 28 年の国勢調査で 25 万 8205 人、世帯数は 10 万 8580 世帯 面積は 67、82 ㎢。平塚市は、

図-1 平塚市の位置

表-1 馬入水辺の楽校の年表

年次	～H9(1997)	H10(1998)～H12 (2000)	H13(2001)	H15(2003)～H20 (2008)	H21(2009)～H27(2015)	H30(2018)～
狙い	相模川下流域の自然保護活動始まる	川の自然と触れ合える場づくり	馬入水辺の楽校の利用促進環境保全活動の理解を広める	運営体制の強化人とのつながりを広げる	環境学習・冒険探検等多様な展開	活動の広域化(環境視点の街づくり)
取組フェーズ	自然保護活動開始	組織作り・運動の普及	国・市・博物館環境保全団体との連携	場の充実・親子の巻き込みと根付き		活動の継続と展開
取組活動・行事	相模川下流にロープを張り子供の遊泳場を作る(H9) **平塚市が水辺の楽校プロジェクトへの参加検討(H9)**	相模川下流域の自然保護活動開始 相模川シンポジウム開催(H10)	開校オープニングイベント 400人参加 生き物調べ(平塚市博物館主催) 野鳥観察会 市民探鳥会 川ガキ養成講座	春.夏.秋.冬それぞれの季節祭り 掲示板の設置(お知らせ.ルール掲示など) トンボ池のエコアップ	浜口哲一自然観察路設置 馬入水辺の楽校ガイドブック発行 やぎ島探検ツアー トンボのすむ街づくり運動	
活動組織	相模川日本野鳥の会(S50) →前身の団体	相模川河口の自然を守る会講師:浜口哲一学芸員(H11) **水辺の楽校推進協議会設立(H12)**	**「馬入水辺の楽校」(H13 4月発足)** **「馬入水辺の楽校運営協議会」(H13 4月発足)**	**「馬入水辺の楽校の会」に改名(H15)**	「エコアップ隊」結成	

相模平野の南部に位置し、背後には丹沢・大山山麓が控え、西方には富士・箱根連山を遠望できる四季温和な気候に恵まれた街である。馬入は相模川を挟んで西に、平塚駅から北東に位置する。平塚に夏の訪れを告げる「湘南ひらつか七夕まつり」が全国的に有名である。商業 では、JR 平塚駅周辺の中心商店街をはじめとして、市内各地区に商店街が形成されている。

3. 馬入水辺の楽校の概要・目的

馬入水辺の楽校の自慢は広がる野原と多様な生き物がいる自然環境がある。目的は、①生き物に対する命の尊さや思いやりを育み、自然とのふれあいや自然体験を通じて、身近な自然環境に気づかせる。②身近な自然環境から、地球環境とも関わっている自然と人間の関係を学ぶ。生態系に理解を深め、生き物のための環境を考え、テレビや写真ではない、本物を知り学ぶ。③自分たちの創意工夫で遊び、自分たちでルールを作る。④ボランティア活動による奉仕の喜びを知る。 ⑤自然の中で仲間と一緒になって遊ぶことにより、社会に対する適応性や健全な精神を養う。

写真-1 馬入水辺の楽校

4. 時系列分析

(1) はじめに

馬入水辺の楽校は準備段階の 1997 年以前から活動している。1997 年以前「自然保護活動開始」、1997～1999 年「組織作り・運動の普及」、2000～2005 年「国・市・博物館・環境保全団体との連携」、2006～2015 年「場の充実・親子の巻き込みと根付き」、2015 年「活動の継続と展開」の 5 項目に分けて、作成した。(表-1)

(2) 自然保護活動開始(1997 年以前)

この活動は 1975 年頃相模川日本野鳥の会から始まった。水辺の楽校の前身の団体にあたる。相模川日本野鳥の会には 240～250 人ほどいた。発足時、

写真-2 相模川

相模川には干潮時 5ha の干潟があった。わたり鳥など野鳥がかなりいた。そこにヘドロの試験池を作るというので環境を守ろうと反対運動に立ち上がったのが発足の目的である。このころから自然保護活動を始めた。そして 1996 年に国土交通省は「水辺の楽校」の全国展開を始める。120 校ほど開校するここから減ることなく、年々増えている。

(3) 組織作り・運動の普及(1997～1999 年)

相模川下流域の自然保護として川の清掃活動、干潟環境を守るための自然保護区指定の署名活動などを行った。相模川下流にロープを張り子供の遊泳場を作り、相模川平塚市馬入地内の無堤部の改修工事が進む中、堤外地に 30000 ㎡の花畑を整備する。1998 年に相模川シンポジウム開催。地域、行政、事業者、相模川に関連する各団体 400 名が参加した。シンポジウムでは川の在り方について話し合われ、花畑については人に優しい川づくりという考えが賛同を得られる。さらに自然環境の保全を考えた整備が必要との提言も出た。1999 年に平塚市の要望に基づき、建設省、平塚市の共同事業として「水辺の楽校プラン」を提出した。

(4) 国.市.博物館.環境保全団体との連携(2000～2005 年)

積極的に自然と触れ合える場所を用意するために、 2000 年に水辺の楽校推進協議会設立。建設省、平塚市、教育委員会、博物館、市民団体によるプラン作りが行われた。2001 年に「馬入水辺の楽校」発足、それに伴い「馬入水辺の楽校運営協議会」も発足した。ポイントは、活動組織の設立である。行政との協力体制構築で平塚市から助成金をうけていたこと。さらに市民参加の促進、地域の意識醸成を目的にさまざまな催しが行われた。生き物調べや秋祭りなどは現在でも行われている。2003 年からは平塚市の助成金制度が無くなり、自分たちで運営しなくてはならなくなった。「運営協議会」が付くと来てもらいにくいので名前だけ変える形で「馬入水辺の楽校の会」になり、規約は協議会のままにした。そこから助成金の申請を行い、運営を安定させた。資金についてですが、年間運営費は約 120～130 万円。収入は助成金、会費収入、寄付、催しがあった時の参加費で、支出は講師の謝金、消耗品費、備品である。2005 年頃から臼井勝之さんが会長になった。組織全員が納得する決め方で前会長が年を取ったのでバトンタッチしたいということで、常に集まっている幹事の人で話し合い臼井勝之さんになった。

(5) 場の充実・親子の巻き込みと根付き(2006～2015 年)

「馬入水辺の楽校」を発足して 5 年が経過し、会員数も約 90 名になった。そして自然環境の復元は図れたが、環境学習活動の継続、運営態勢の強化が課題で、この頃はまだ、犬の放し飼いの散歩が目立った。

春は凧揚げ大会、夏になったら恒例になっているやぎ島探検ツアー、秋祭りなどその季節にしか出来ないことを親子で参加してもらった。さらにエコアップ隊を結成し、自然と触れ合える多様な催しをたくさん行った。そして行政に「トンボのすむ街づくり」を提案している。エコアップとは、都市化され、自然環境が失われた地域の生物的環境を改善していこうということだ。単に、木を植え、緑をふやすといった活動だけでなく、より多くの生き物がそこに棲むための環境を整えていく活動である。「水辺の楽校交流会」にて多摩川、荒川、江戸川の水辺の楽校との交流や、相模川触れ合い懇談会に参加し、世話役として「いい川づくり」に取り組むなど、臼井さんが活動するうえで人とのつながりを 1 番大事にされている、今まで以上に人とのつながりを広げることを意識しているからこその活動である。

そしてポイントは会の活動の社会的認知を獲得するために、表彰への応募を行った。2009 年に関東・水と緑のネットワーク拠点百選に認定され、助成金をいただいた。関東・水と緑のネットワーク拠点百選は、多くの生きものたちとともに暮らす生活を取り戻す必要性を感じて、日々活動されている方々に、自然と共存した持続可能な地域づくりを進めている方々を応援していくことを目的としている。

さらに国土交通省主催の「川の通信簿」への参加を決めた。「川の通信簿」とは、河川空間（公園や親水施設、自然等）の現状について、市民団体と行政との共同作業でアンケート調査を実施し、利用者の視点から満足度を評価するもので、満足度を 5 段階で評価することで、良い点・悪い点を把握し、魅力ある河川空間の保全や悪い点などの改善等を行い、良好な河川空間の保全、整備を図っていく事業である。他にも東京ガス環境おうえん基金より助成金を受け、人とのつながりで、平塚の自然を守る会から解散に伴い活動資金の寄付を受ける。さらに HSBC 社からの活動資金を受ける。これらの助成金の活用は、場のハード面の充実や専任講師の招聘である。施設は、トンボ池や浜口哲一自然観察の路、自然発見きっかけパネルなどの設置を行った。専任講師の

写真-3 馬入水辺の楽校の実習模様

招聘というのは、株式会社 Biotop Guild 三森さんや東京工科大学の生徒や三森さんの友人などの様々な方が参加している。これも臼井さんが人とのつながりを大事にされているから実現されている。

(6) 活動の継続と展開（2015 年～）

現在の会員数は会費を払っているのは 100 人くらい、子供を含めると 150 人くらいである。相模川河口を守る会の人も過去のつながりで会員になってくれている。その人たちは、北海道や京都の人もいるが見返りを求めず、この活動を応援してくれている人である。主に平塚市の人だが、茅ケ崎市や藤沢市や横浜のほうから来られる人もいる。これからも活動の継続をするには、運営費を安定させ、会の活動を社会的に認知してもらうことが大切である。PR は広報誌やガイドブックの発行、大学生との交流や、市民活動センターとの交流、TV の取材などがある。さらに平塚市とひらつか環境ファンクラブに「とんぼの棲む街づくり」を提案した。この活動の目的は①市民参加による生物多様性の保全活動 ②子供たちを野に戻す、つまり自然に返そうということだ。

(7) 今後の課題

現在、組織のメンバー構成で 65 歳は超えた 5、6 人の男性が多様な企画や、助成金の申請など、すべてを実行している。水辺の楽校には、現状では若いメンバーがいない。そして参加する親子連れが増えてきているが、運営を手伝う人は少ない。臼井さんのインタビューでも分かるように若い人、つまり、20～50 歳の間の人がいないことが大きな課題である。若い人が参加するために PR はもちろん、「相模の国から自然塾」というまだテスト段階の企画への参加を呼びかけ、大学生との交流や、市民活動センターとの交流、マスコミからの取材も受けた。PR の方法やどのように人を集め理解してもらい継続するかの検討が必要である。また平塚市の小学校と連携を図り、授業の一貫として相模川はとても素晴らしいことをまずは子供達に理解してもらう。そしてそこから親と共に馬入水辺の楽校に参加してもらうことも考えられる。

5. まとめ

2003 年に平塚市からの助成金が貰えず、馬入水辺の楽校の会に名前を変えた際に他の助成金を積極的に応募し、会長のリーダーシップと人脈により専任講師の招聘をすることが出来た。行政が主体となって運営している水辺の楽校が多いが、地域市民が主体となって運営している水辺の楽校はめずらしい。

インタビューで若い世代の参加が極端に少ないというのが現状であり、これが、「馬入水辺の楽校」が抱えている課題であることを事例集の内容などから明確にした。

参考文献

1) ひらつか元気地域づくり事例集
2) 馬入水辺の楽校の会 2014 活動報告書
3) 国土交通省 水辺の楽校:
http://www.mlit.go.jp/river/kankyo/main/kankyou/gakkou/itiran.html
4) 馬入ふれあい公園、馬入・光と風の花づつみ（ばにゅうふれあいこうえん）Images may be subject to copyright
5) 河川財団 河川基金:
http://www.kasen.or.jp/kikin/tabid288.html

(2017.7.31 受付)

Banyu Mizube no Gakkou in Hiratsuka City, Kanagawa Prefecture

Satoshi SHIMIZU, Yoshitaka KAJITA

This research studied the management of ‘Banyu Mizuben no Gakko’ for citizen and classified activities from end of construction until now to analyze actual situation and issue about ‘Banyu Mizuben no Gakko’. Mizuben no Gakko started from MLIT’s project which objective was “society that learns from the river”. Young generation and workers joined the project in a few amount. So, it caused a problem to ‘Banyu Mizuben no Gakko’. The results showed that there was no members in the age from 20 to 50 years old.